



TITLE:

# 第2回黄道光會議にのぞみて (續日食報告號)

AUTHOR(S):

寺町, 忠行

---

CITATION:

寺町, 忠行. 第2回黄道光會議にのぞみて (續日食報告號). 天界 1936, 16(186): 481-484

ISSUE DATE:

1936-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167337>

RIGHT:

## 第2回黄道光會議にのぞみて

寺 町 忠 行

### (1)

さきに恰度前のオリンピック大會がロスアンゼルスに於て開催された年の7月20、21日の兩日、第1回黄道光會議が石山に催されて、滿4年の後、時も同じな7月19日（この日はまた北海道の皆既日食戰から1箇月目の思出深い日である。）に、北海の地にて充分なる功ならざりしストラツトン博士、ロイツ博士をかこんでの第2回黄道光會議が近江琵琶湖ホテルに於て開かれ、私もその末席に連ることの出来たのは私の悦びとするところである。この4年間、私達の黄道光課にも種々な變化あり、一步々々きづき上げられた光課の尊い歴史の存する處であるが、その主たるものは、第1に花山に黄道光中央局のおかれたことであり、また第2には濠洲バウスフィールド氏との國際協同觀測、第3には近く6月19日の日食に本課員本田實氏により日食時中の黄道光が觀測されたことである。かうした種々な想出の4年間について語れば、話つきないところであるが、今ここにそれらを語るべき處ではなく、私は私に課せられた仕事としての、第2回黄道光會議の狀況を、或は默々と鉛筆を運ぶ速記者の様に、或はある犯罪事件の目撃者のやうに語らう。私の訊問に對する答から諸氏が如何なる探偵の鍵をにぎられるかは自由であり、そしてそれをどの様に運用されるかも、そのひとに待つところなるが、若しそれがひよつとしたら、それが宇宙恒數を決定する場合に考慮せられなければならぬものであつてほしいと思ふ。（或はそれに就て私の速記が満足と與へないかもしれないが、それは私の記憶を辿つて書いたものが、その殆どを占めてゐると云ふ點に於て許していただきたく、またその爲に話が前後するところあるやもはかられぬが、諸氏の諒恕を待つところである。）

### (2)

私はこの日の數日前に約束せられた廣瀬氏と、そして偶然にも列車中にて一緒になつた天文臺の木邊氏と、木邊氏の日食觀測行を聴きつつ會合の場處の大津市柳ヶ崎・琵琶湖ホテルに定刻少し前に着いた。そして、手紙を通じ

ては親しくお話ししながら初めて逢ふ方々と自己紹介やら、そしてもう一遍に本當に古くからの友人であるかのやうに、種々な觀測上の體驗談に興じ、琵琶湖畔を散歩して時の來るのをまつた。湖畔は人魚で一ぱいだつた。

この日、御出席の先生方、私達、そしてストラツトン博士、ロイツ博士等併せて22人の會食が終ると、直ちに決められた部屋にて會議に移つた。會議は山本先生の挨拶に始まり、ストラツトン博士、ロイツ博士の希望、御意見に及び、そして私達の時を忘れての會談となつた。これらを出來る限り忠實に、私の記憶を辿つてしるしてみると次の如くである。

### (3)

#### 山本先生のお話：——

黄道光觀測の記録せられてゐるものは、それらが殆ど斷片的のものであり、我國におきましても、28~29年前に黄道光が觀測せられ、その色刷りが英國の本に現れてゐると云ふことを聞いてゐますが、最近黄道光に就いて注意せられるやうになり、1921年三澤氏の組織的觀測あり、また本會に黄道光課の設置をみたが、1928~9年頃龜井氏、荒木氏の觀測をはじめとして、やうやく黄道光觀測の機熟してまゐりましたが、未だ斷片的なるをまぬがれませんでした。それが1931年荒木氏が課長になられる頃より黄道光課はめざましい發展をとげ、1931年龜井氏が幹事になられ、1932年龜井氏が極年の爲の太陽觀測に當られることとなつて、龜井氏にかはつて淺野氏が幹事になられ、淺野氏の仕事は極最近までつづき、黄道光課發展の爲大いにつくされたが、御身病弱の爲、最近に於ては1935年廣瀬氏をも幹事として2人協力、課の爲盡して來られたが、1936年廣瀬氏幹事を辭せられると共に淺野氏にも幹事をやめられる話があり、1936年4月の終りから新幹事寺町氏が課の仕事をされることになり現在に及んでゐる。この間1931年には龜井、荒木兩氏の同時觀測による變動、消長の發見あり、また黄道星圖の出版、1932年には石山に於ける黄道光會議、或は黄道光課通信の發行あり、また近くは1935年オーストラリアのバウスフィールド氏より、ここに居られます國際天文同盟の總幹事ストラツトン博士を通じての協同觀測の申込あり、我々はこれを受諾すると同時に、相互時間の協定をなし、現在にまで同時觀測をすすめてつある。そしてこれらの觀測結果は花山天文臺に送られつつあるが、我國のものについては

現在寺町氏により整理されつつある。それより後、1935年7月パリで開かれた國際天文同盟の總會の結果、流星部委員會の一部門として黄道光部委員會が設けられ、その委員長に私があげられ、その中央局を花山天文臺におくことになった。その結果、私はこの黄道光部の委員として C. Hoffmeister, Donitch, Cap, その他の諸氏及び日本からも2,3名加つていただきたいと考へてゐる。またこの觀測所として尾道を選んで話をすすめてゐるが、まだそれは實現の域に達したるものではない。將來、この觀測所に於ては太陽黑點、其の他地電流、地磁氣の觀測と相俟つて、氣象に注意すると共に、この觀測所では機械により、精密觀測をすることによつて、國內黄道光課員の觀測と共に、天界の不思議な光を追究したいと思ふ。

私が何故に氣象に注意し、地磁氣、地電流の觀測または太陽黑點の觀測をも併せなすかについては、黄道光が地球の原因によりてなれるものであると、太陽を取巻く微粒子によりてなれりとする所謂、天文學的成因なりとするそのいづれであるとかかはらず、かうした精密觀測の結果と共に黄道光を検討することが必要だからである。これに就ては一方、去る日食觀測の結果、コロナ中に非常に細い一直線の長いストリーマが四つ五つ太陽から發射してゐる事實を思ひ、また最近は太陽の黑點活動が種々の形を以て我が地球の極めて一極地に影響してゐること等を考へ合せると、これらのものが何等かの新材料を提供するものと思はれ、また黑點周期に依つて如何に黄道光が影響されるかが重大だからである。

#### (4)

ストラットン博士 起上り、右にこたへて、

黄道光の委員會が國際天文同盟の一部會として新設され、その中央局が花山天文臺に置かれることになり、またこの國に黄道光觀測所が設けられんとしてゐることは、大變喜ばしいことにて、ここに皆様と共に御悦び申し上げます。

黄道光の今後の觀測、研究には同時觀測が必要であつて、既に濠州との協同觀測がなされつつあると云ふことは、うれしいことです。私の同時觀測に對する意見を申し上げれば、同時觀測が地理的に見て單に漠然たる擴がりを持つものではなく、同緯度に於ける異經度、同經度に於ける異緯度の地點に於

て、氣象變化に注意しつつ觀測されることが必要であると思はれます。そしてこのことはその觀測線を延長して各國の協同觀測により、變動消長の研究されんことを望みます。

黄道光の變動、消長に就ては前述の如き協同觀測により研究を進めるべきであるが、その注意すべきは長周期變動であつて、若し顯著なる極めて短い周期の變動を見つけた場合は、それが心理現象によるものではないか、或は氣象的原因によるものではないかと疑つてみる必要があるでせう。

長周期變動とは太陽の活動と如何に關係し、それが11年、或は22年の周期をもつてゐるか否かと云ふことであり、また一方黒點の活動狀況と如何に關聯せられて行つてゐるか云ふことです。

尾道に觀測所が設けられんとしてゐると云ふお話であるが、かうした觀測所では山本博士のお言葉にもありました様に、精密な器械を用ひた觀測が望ましいことであつて、スペクトルの研究等なさるべきと考へられます。またこれに伴つて寫眞觀測等も必要でせう。

次に問題なのは黄道光の明るさであるが、これには明度の標準としてロッド・レーレーの方法を用ひてはと思ひます。この外、視差の研究もなさるべきでせう。かうした研究に依つて黄道光が一體何であるかと云ふことがつきとめられると思ひます。

### (5)

ストラツトン博士の話について今度は<sup>アイ・グラス</sup>ロイツ博士、その白哲な、鼻目鏡の面をあげてたちあがり、

私の居ますコダイカナル天文臺は主として太陽の觀測等、晝の仕事をしてゐますが、時々夜間星を覗くこともあり、また黄道光を觀測することもあります、さつきも申しました晝の仕事に費す方が多いのです。

黄道光の寫眞觀測に就てですが、この方面の熱心な觀測家テイラー氏から、或る時寫眞觀測につき質問を受けまして、種々調査して返事をしてあげ、指導もしたことがあります、この仕事は大變困難なことです。

印度は日本に近くもあり、緯度低き故、黄道光の觀測に都合のいいところであり、今後日本と印度との協同觀測の企てられむときの近からんことを望むでやまぬ次第であります。